# 児童同士が対話を通して運動の能力を高め合うための小規模校における指導の工夫

## ー異学年(学年ブロック)で構成するグループを活用してー

特別研修員　体育　小金澤　真住（小学校教諭）

### 児童の実態

・運動のイメージがつかめない
・苦手意識から意欲をもてない

実践授業
『3・4年セストボール』

### 小規模校の課題

・多様な友達と関わる機会が少なく互いのよさをじっくり見合う機会が少ない
・活躍できる児童やチームのリーダーが固定化されやすい

### 教師の願い

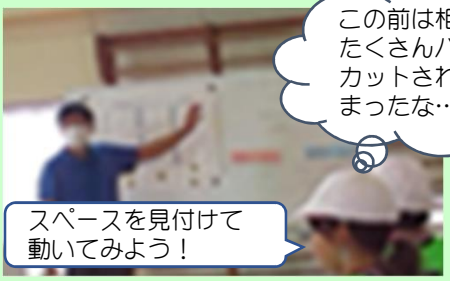
・体感的に運動技能のコツを身に付けさせたい
・友達との関わりや運動の楽しさを味わわせたい

する・みる
支える・知る
活動機会の保障

## 手立て1　異学年で構成するグループの活用

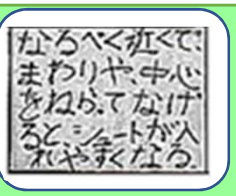
**異学年グループで互いのよさや成長を見合う場**

**活動の見通しや学習の進め方をホワイトボードに可視化・共有化**




## 手立て2　対話を促すための環境やルールの工夫

**安心感・所属感をもって活動できるグループごとの場や教材**




グループごとの課題を解決していくために一つずつ用意されたゴール（所属感）

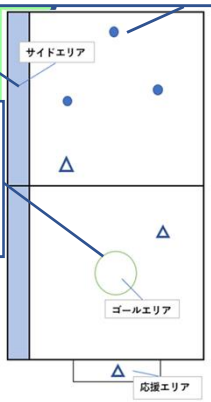
シュートを外しても、360°繰り返しどこからでもねらえるゴール（安心感）

**グループが協力することで成果が現れるルール**

ボールを持って自由に動くことのできるサイドエリア

パスが通りやすいよう攻撃の人数を常に一人多くする

シュート機会を増やし、スペースを見いだしやすくするため、ゴールエリア内には攻守ともに入らない




**目指す児童像**
**対話を通して運動能力を高め合う児童**

### 成果

○運動の得手不得手に関わらず、上学年は技能のコツを動作化しながら分かりやすく伝えようとする姿が見られた。下学年は上学年のよい動きや助言をもとにコツを確かめながら技能を身に付けようとする姿が見られた。
○チームの特長や友達のよさを認めながら、苦手な児童も活躍できるよう練習を行う姿が見られた。

### 課題

○グループごとの場や教材を工夫し、対話による活動を評価していくためには、教師の見取りやワークシートの記述だけではなく、活動やつぶやきを記録媒体に残す必要があると感じた。